

令和7年度全国学力・学習状況調査 鹿児島県 結果分析(概要)

学力調査の分析・考察

本年度は、学力の実態を詳細に把握するため、平均正答率等の全国との比較の他に、次についても分析した。

- 全国四分位を基にした正答数ごとの層分布
- 過年度との比較による傾向
- 同一集団の前回調査(令和4年度)からの変容

【小学校】

	平均 正答率	観点別	
		知・技	思・判・表
鹿児島	67	74.3	63.5
全 国	66.8	74.5	63.8

- 下位層は全国より少ないが、全国と比べ上位層が少ないことが課題。ただし、極端な二極化は見られない。
- 領域別では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「書くこと」は、全国を上回る結果で推移しているが、「情報の扱い方に関する事項」「話すこと・聞くこと」は全国を下回る結果で推移。
⇒ 基礎的な学力の底上げは図られているため、より高次な思考や表現を深める学習の充実を図る授業改善が必要。

【中学校】

	平均 正答率	観点別	
		知・技	思・判・表
鹿児島	53	44.3	54.9
全 国	54.3	48.1	55.3

- 全国と比べ上位層が少なく、下位層の割合が増加傾向。
- 小学校6年生時(令和4年度調査)の結果との比較では、中下位層の割合が増加傾向。学力の二極化が進んでいる。
- 「書くこと」「読むこと」は、全国を上回るかほぼ同等で改善傾向。「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、全国を下回る傾向
⇒ 知識及び技能の定着の場と思考力、判断力、表現力等の育成を目指した活用の場を往還させる授業改善が必要。

【小学校】

	平均 正答率	観点別	
		知・技	思・判・表
鹿児島	57	65.5	47.1
全 国	58.0	65.5	48.3

- 全国と比べ上位層が少ないことが課題であるが、下位層の割合は全国と同水準であり、学力の下方拡大は抑えられている。
- 領域別では、「変化と関係」は全国を下回る結果が続いている、数量の変化を関数的に捉えて考察する力の定着に課題。
⇒ 思考力、判断力、表現力等を高められるような授業改善が必要。

【中学校】

	平均 正答率	観点別	
		知・技	思・判・表
鹿児島	45	52.1	34.1
全 国	48.3	54.4	39.1

- 全国と比べ上位層が少なく、下位層の割合が多い。
- 小学校6年生時(令和4年度調査)の結果との比較では、中下位層の割合が増加傾向。学力の二極化が進んでいる。
- 「数と式」、「図形」領域が全国を下回り、その差も拡大傾向。「図形」については、小学校6年時も全国を下回っており、その差が拡大傾向(苦手な学習の克服ができないままになっている)。
⇒ 基礎的な概念の理解を深め、思考力、判断力、表現力等を高めることができるように授業改善が必要。

【小学校】

	平均 正答率	観点別	
		知・技	思・判・表
鹿児島	60	59.1	60.6
全 国	57.1	55.3	58.7

- 全国と比べ上位層が多く、下位層が少ないため、学力の底上げができる。
- 全ての領域で、全国を上回っている。
⇒ 引き続き、「どの場面・過程において、どのような理科の見方・考え方を働かせるか」を視点とした授業デザイン、授業改善を継続。

【中学校】

	IRT スコア	観点別平均正答率	
		知・技	思・判・表
鹿児島	493	52.9	43.9
全 国	503	55.1	45.4

- 上位層に当たるIRTバンド4・5の割合が低く、IRTバンド2の割合が高い。
- 公開問題における領域別の結果では、全ての観点で全国を下回る。特に、「『エネルギー』を柱とする領域」に課題。
⇒ 基礎的・基本的事項の定着を図りつつ、「理科の見方・考え方」を適宜働かせる授業デザイン、授業改善が必要。

※公開問題の結果から独自に算出

質問調査の分析・考察

- 授業理解については、小学校は高いが、中学校は低い。
- 「主体的・対話的で深い学び」、「主体的な学習の調整」に関するほとんどの項目で全国を下回っている。
- 自己肯定感については、全国と比べ、小中学校共に5ポイント以上下回っている。

【学力調査との相関】

- 「授業がよく分かる」の回答と学力調査との相関係数

小学校			中学校		
国語	算数	理科	国語	数学	理科
0.23	0.43	0.24	0.21	0.41	0.27
○	◎	○	○	◎	○

相関係数 r とするとき、次のようにみなす。

- ・ $0.2 \leq r < 0.4$ ならば弱い正の相関(○)がある。
- ・ $0.4 \leq r < 0.7$ ならば正の相関(◎)がある。

- 全ての教科において、「当該教科の授業がよく分かる」との回答と学力調査の結果との間には正の相関または弱い正の相関がある。

- 「授業がよく分かる」と「主体的な学び」についての相関係数

小学校			中学校		
国語	算数	理科	国語	数学	理科
0.34	0.35	0.27	0.26	0.31	0.25
○	○	○	○	○	○

- 全ての教科において、「①課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ(主体的な学び)」、「⑯学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点等を見直し、次の学習につなげることができる(主体的な学習の調整)」と「授業がよく分かる」との相関係数が比較的高く、授業の理解度との関連が強い。

⇒ 「主体的・対話的で深い学び」の実現のために授業改善に取り組むことや、児童生徒が主体的に学習を調整することができるようになることが必要。

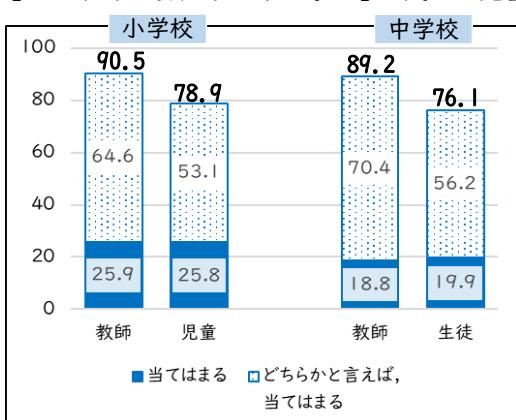
- 「授業がよく分かる」と「主体的な学習の調整」についての相関係数

小学校			中学校		
国語	算数	理科	国語	数学	理科
0.33	0.36	0.27	0.24	0.31	0.22
○	○	○	○	○	○

【主体的・対話的で深い学び】と【主体的な学習の調整】の関係

- 「主体的な学び」に肯定的に回答した児童生徒ほど、「主体的な学習の調整」でも肯定的に答える割合が高く、両者の相関係数は小学校で 0.52、中学校で 0.48 と正の相関が見られる。
 - 「主体的・対話的で深い学び」と「主体的な学習の調整」とが相互に関係しながら、児童生徒の学びの質が高まる。
- ⇒ 児童生徒が自己選択・自己決定しながら主体的に学ぶ「学習者主体の授業」と、学習の質を確保した家庭学習の充実が必要。

【「主体的・対話的で深い学び」に関する児童生徒と教師の意識】



(学校調査の設問内容)

調査対象学年の児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。

(児童生徒質問調査の設問内容)

授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。

- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に関する児童生徒と教師の認識に差が見られ、授業者の意図した学びが、児童生徒にとって「主体的に学んでいる」という実感として十分に共有されていない。

⇒ より一層の「学習者主体の授業」の充実が必要。

【自己肯定感は謙遜によるものか?】

- 「教師から認めてもらえる」と感じている児童生徒ほど、自分のよさを実感している割合が高い傾向。一方で、「教師から認めてもらえる」と感じていても、「自分にはよいところがある」と答えない児童生徒も一定数存在するが、その割合は 1% 未満。
- ⇒ 自己肯定感の低さは、文化的な謙遜意識によるものというよりも、児童生徒自身が自らのよさを実感する経験不足に起因している可能性が高いと考えられる。